

朱夏

下

宮尾登美子

朱夏

下

宮尾登美子

工业学院图书馆
藏书章

朱^{しゆ}夏^か
(下)

一九八五年六月二五日 第一刷発行
一九八五年八月一〇日 第三刷発行

定 価 九八〇円

著 者 宮尾登美子^{みやおとみこ}

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

一〇一 東京都千代田区一ツ橋二一五一〇

出版部 (〇三) 二三八一 二八四二
販売部 (〇三) 二三〇一 六一七一
製作課 (〇三) 二三八一 二九六四

電話

印刷所 大日本印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛
にお送りください。送料は小社負担でお取り替え
いたします。

©1985 T. MIYAO, Printed in Japan

ISBN4-08-772529-4 C0093

朱 夏 (下) 目次

第三章 逃走―宮城子(一) (承前) 五

第四章 越冬―宮城子(二) 壹

第五章 九 台 一六

〔付〕「朱夏」をめぐって 二七三

装帧 田村義也

朱^{しゆ}

夏^か

(下)

第三章 逃走——宮城子(一)(承前)

綾子が倉庫を出るのは初めてのことで、入口のわきに築いてある煉瓦れんがの竈かまど、その前の水びたしの調理場に敷いてある幾枚かの板の上を、跳ねるようにして渡って出ると、目の前は大通りの坂であつた。

いく日前だつたか忘れているが、九台きゅうだいからトラックで運ばれて来、たしかこの坂を上って本部の前でおろされたとは思ふものの、落着いていたつもりでもやはり動転していたのか、確かな見覚えはなかつた。

高い給水塔のある本部の前に立つてみると、周囲は見渡す限り赤肌の丘が起伏しており、ここもその山のひとつで、山の裾にはぐると鉄線を張りめぐらせてある。大通りを上りつめたところ、南寄りの山頂の本部からほぼ放射状に赤煉瓦の建物が雛段式に並んでいる。

本部というのは、いまは日本人本部のことを指すのだが、もとはこの宮城子炭鉱えいじょうしの事務所だつたそうで、村田先生について中へはいつてみると、たしかに殺風景な事務所風景で、人かげも

まばらであつた。

綾子はここではじめて、といつていいほど「社宅の連中」というひとを見たが、それは開拓団の男子とはまたひとつ違った面がまゑだと思つた。団のひとたちは、先遣隊でもまだ二年にしかならず、家族ときたら綾子同様この地に渡つてわずか半年ほどだが、社宅のひとたちは、こちらの生活がもう長いのをその顔からして物語っているように見える。

はつきりと区別の目じるしになるのは、社宅の男子は例外なく黒い木綿の半満服にズボン、といういでたちなのに較べ、開拓団では支給されたカーキいろの作業着を、大人も子供も、また婦人たちもいつも身につけていることであつた。

開拓団にも満語の達人はいるにはいるらしいが、そういうひとが目立つほど一般はまだ言葉に馴れないのに引きかえ、社宅のひとたちは全員といつていいほど、自由に言葉を駆使できるということがある。もつとも、そういう事情が判つて来たのはずつとのちのことで、このとき綾子は満人とも日本人とも違う異人種に会つたような気がした。

渡満後、会うひとといえは入院中をのぞき付近の満人と開拓団の子供たちだけ、いま、土佐弁でない日本語と、よどみない満語をべらべらと口にできるひとたちを見たとき、少なからぬ驚きと同時に、瞬間的な絶望感があつた。

このひとたちに何を話しても無駄、という感じに打たれ、急に押し黙つた綾子の背を押すようにして村田先生は事務所の中に入り、そこにいた二、三人のひとに話しかけた。

「あのう、申し兼ねますが、こちらが赤ん坊を抱えて、乳が全く出ないというものですから、お粥の特配をお願いできないかと思ひまして」

と揉み手するようにいうのを聞いて、綾子は呆れ、何といういいぐさかと思った。

いい出したのは病人用の特配をもらいたいという自分なのに、こつちにばかりおつかぶせている、と口まで抗議の言葉が出かかったが、心の底ではまた、そんなことどうでもいいじゃないか、と考えている自分がいる。要するに、ここで土下座したっていい、このやみ難い空腹をたとえ一ときでも充たしてくれば、罵られ、蔑まれるくらい痛くも痒くもありやしない、と思うのであった。

村田先生その言葉を、室内の満服は一旦「え？」と聞くふりをしていて、すぐまた隣の満服と話を続けており、手を重ねて返事を待っている村田先生と綾子は全く無視されてしまっている。たまりかねて村田先生が、

「私は先ごろ、こちらの診療所でお世話になりました者ですが」

と名乗ると、本部詰め of 満服はようやく「ああ」とうなずきはしたが、見覚えはないらしく、その代り今度はやっと聞く気になったというふうに、

「ご用件は？」

と向きなおった。

村田先生がくり返すその陳情を皆まで聞かず、

「ああいや、あなた、ここじゃ赤ん坊抱えてる婦人はたくさんいますよ。そんなのいちいち聞いてちゃ、食糧はすぐ底をついちゃうのですね。みんな辛抱しなくちゃ」

とアクセントも言葉も違う調子でまくし立てられ、綾子はさすがに打ちのめされて後退りに本部を出た。

後に残った村田先生が、今度は病人用としての特配を懇願しているのかとも思われたが、そんなことはどうでもいいことであつた。

最初一瞥したときから、あの満服の男たちに温情などあるとは思えぬ予感がしたが、やはりその通り、荷物も住居もそのまま無傷でここにいる連中に人の困窮など判るはずがないと思う。あのひとたちはきつと、朝起きれば顔を洗つてあたたかい御飯と味噌汁をたべ、男は本部へ出かけるとしても、女たちは綾子が飲馬河でそうしていたように、日中は布をひろげて裁縫したり、子供のおむつもまめに取換えてやり、昔どおりの生活習慣を続けているに違いないと思うのであつた。

戸を一枚開ければ、外には難民がいて、それは死ぬにも死ねない程度の少量の餌を与えられて悶え苦しんでいるのを、あのひとたちは果して考えたことがあるのだろうか、と思うと綾子は無性に憤ろしくなり、うしろを踏みつけてスリッパのようにして履いている男靴で、道の辺の小石を思いつきり蹴つとばした。

小石は連動して他の小石を誘ひ、坂道をころころと転げ落ちていったが、綾子はこのときから「社宅の連中」と聞いただけで深い敵愾心を抱くようになり、それは戦後しばらく経って事情が明らかになるまで決して解けなかつた。

宮城子炭鉱というのは、もと鉱区を持つていた満人から日本人が譲り受け、昭和九年頃、経営を軌道に乗せたといわれるが、本社は新京にあり、この山にいた日本人社員はおよそ百五十人ほどだったという。

難民が集結する以前、ソ連参戦と同時に、新京本社からこちらへ妻子を疎開させたひといて、

そのひとたちはリュックひとつで身を寄せたがために、内部では社員同士でもいろいろな揉めごとがあつたらしかつた。

敗戦以前の山の社員の構成は、上層部は一人二人の例外を除いては日本人ばかりで、坑夫には満人や朝鮮人を雇つており、そのひとたちの宿舍や集落はこの山の鉄条網の外にある。経営はわりあいうまく行つていたらしく、炭坑の排水を一旦池に貯め、そこから水を取つて付近にたくさん水田を満人に作らせ、餅米や米、また高粱をおびただしく、ここの倉庫に貯えてあつたという。

綾子たちに配給された高粱粥も、村田先生が入院中に目撃したという白米も、倉庫に貯蔵してあつたもので、持主は営城子炭鉱会社だったが、そういうからくりは当時の綾子には一切判らなかつた。男たちには判つていたかも知れないが、誰も女たちに事情は話してはくれず、またたとえ話してくれたとしても、目下の空腹が納得できるわけもなかつたのである。

見廻すと、この大通りで社宅側と倉庫側とに分れ、倉庫の側は上に変電所、下にまだいくつか棟がある。はるかに見える鉄条網の外側には、黒い満人の姿がちらほら見かけられるが、いつかの戦闘のような緊迫した空気はもうほとんど感じられなかつた。

しかし希望を託して倉庫の外に出はしても、敢えなくそれが消えてしまった綾子にとっては四囲の景色などどうでもよく、なまじ社宅の連中の軽侮に充ちた視線を浴びたことといつそうささくれ立った心をもてあましながら坂を下ってくる。何度考えても、こんな暮しのなかで赤ん坊を抱えているほど口惜しいことはなく、この子さえいなければどんなことだってできる、と綾子の気持はやはりそこへ辿り着く。営城子のこの鉄柵のなかには、自由のかけらもないかに見える

けれど、綾子と同一年くらいの若くて身軽なひとたちは結構毎日、すすいと行動して笑い声も立てており、それなりに楽しげに暮しているようにさえ見える。

最初は男たちだけ警備に狩り出されていたものが、襲撃の恐れが遠のくと、小学五年以上の男と、子のない女は全部、毎日本部へ集合することになっており、それは使役に出ているのだという。

夫婦であっても、こんな共同生活で私語などしてはいけないものと綾子はずっと考えており、夜になっても美耶を中に、なんにも聞きもせず聞かれもせずすごしてきているのだけれど、一度だけ、

「使役ってなんの使役？」

と問うと、要もまわりを憚る様子で、

「満人の搬家（ひっこし）の手伝いやいろいろ」

と短く答え、綾子はそれを聞いてああそうか、人足か、と思っただけであった。

隣の木崎姉妹も、姉は子育ての責任者だから使役は免れているが、妹は毎夕、手袋や頭巾を脱ぎながら帰って来て、姉妹で賑やかに話し合っているのが聞え、それは綾子にしてみるとやはり、外の空気を吸ってきた人間の活気みたいなものが羨ましく感じられるのであった。

本部へ粥の特配を頼みに行つて断られた話を、綾子は要にもいわなかった。

わざと黙っていたわけではないが、二人だけの時間なんて全くありはしなかったし、それに空腹の話はお互いに避けているふしもある。要に訴えて、いく分かの解決を望めるならいいけれど、要自身もここに来て急に陥ちくぼんだ目をして毎日労働に耐えているのであれば、むしろいたわ

ってやらねばならないのは、一日中遊んでいる綾子のほうであるのはよく判っている。判ってはいても、いま要を思いやる気持の余裕はなくて、それは美耶の存在が悲しくてならないと同様、夫などいても何にも頼りになりはしないと心の底で見限っているところもないではなかった。

この倉庫に入って一ヶ月近い頃、外の治安もやや落着いて来、集結している日本人もある程度恒久的な暮らしの態勢を立てなければならなくなったと思われる理由で、全員引越しをすることになった。

そういう計画や相談を誰がどこでしているのかは判らないが、その日は朝から大騒ぎで、同居のひとたちは荷物をまとめにかかっているのを、綾子も絹枝もただじっと眺めている。どこへ引越すのやらも知らず、引越すといっても蒲団と、一束のおむつを運べばよいだけだから、団のひとたちのように荷作りする必要はすこしもなかった。

ここへ入った当時、入口へ山のように積みあげてあったあの捨てた荷物はいつのまにか無くなっており、それは、いのち延びればまたもとのように甦ってきた必要と物欲から持主が取り戻したものだっと思われる。男たちは使役に出ていたが、労働に馴れた女たちは軽々と荷運び出していづれかへ消え去りつつあり、^{むしろ}苙の上は次第に広くなってゆく。

誰も学校関係者たちに挨拶などせず、綾子たちもまた、立ってその荷作りを手伝うということもなかった。何処へ落着くのだらうかと思うこともなく、ここで生死の境を占いながらともに恐怖にふるえたことなどとうに忘れ去って、はじめから全く関わりのないもの同士のようにどこかへ出てゆくのであった。

夕方近くなって、団のひとたちの葛籠^{つづら}や行李などがほとんどなくなった頃、例のラジオといわ

れた女が忘れものはないか、といったていで見廻りに戻って来て、ぐるりと点検し、帰りぎわ大声で、

「三好先生の奥さんの着ちよるねんねこはうちのじゃけんどねえ。うちら、おおきにともうてもうたことはないし、戻してもくれん」

と、さすがに視線をそらしながら入口で叫び、それに対して綾子が根くなりながらも何の返答もしないのを見届けてから、名残り惜しそうに去っていった。

倉庫のなかにはまだ人影は残っていたが、誰も何もいわなかったし、聞えているはずの絹枝も利子もじつと口を噤んだままであった。

お返しします、というべきだったろうか、と綾子は壁を向いて考えながら、しかしやっぱり胸のうちでは憤怒が渦巻いている。捨てたものを拾ったのがなんで悪い、あの激戦のときは誰も一時間あとの命の保証がなかったのではないか、と抗議が噴きあげてくるけれど、それは同じ立場にある絹枝が黙っている限り口にはできなかった。

綾子のねんねこは、不幸にしてあのラジオの持物であったがために、満座のなかで暴露されたけれど、絹枝のねんねこだって、利子の蒲団だって、みんな開拓団のひとたちが捨てた荷物を拾ってきたものではないか、と思う。絹枝と利子の沈黙は、自分のがラジオのものでなくてよかった、と胸を撫でおろしているところかもしれないが、しかし何であれ、一旦手に入れたねんねこと蒲団はいまや自分たちの貴重な全財産であり、梃子でも返すもんか、という表明であるように受け取れないこともない。

開拓団のひとつの中には、自分の蒲団を綾子たちが使っているのを、毎日らはらしながら見

守っているむきもあつたかもしれず、それは、なまじ口にしたラジオよりもっと深い思いがかけられているかもしれないが、しかしいま、自分たちが知ったことではないと綾子は思った。人間これ以下、落ちるところがあつたら教えてもらいたい、と居直る気持があり、荷物を持って避難したひとに、ほんとうに文字どおり着のみ着のまま、天地のあいだに自分の体と一枚の着物しかない人間の気持が判つてたまるものか、と思うのであつた。

思いつつ綾子は、ここに来て一ヶ月足らずのうちに、自分もずい分強くなったものよ、という感慨がある。

もしここで、昔どおり持物があつたなら、同居のひとたちに一人一人丁寧に礼をいい、物も気前よく分け与えるのに、衣食足りない状況は、人間の気持まで荒廃させると思い、いまはそれに甘んじざるを得ない自分をいたしかたなし、と考えるのであつた。

使役を終えて、岡本先生と要が帰つて来たのはもう夕暮れで、ここで最後となる夕食の配給を受けてから、新しい場所へ移ることになった。

荷物をほとんど取り払つた庭の上で鍋を囲んだあと、隣の伊川夫人がしとやかに頭を下げて、「では私どもお先に。ごめん下さいませ」

とただ一人挨拶をしてくれ、親子四人、蒲団を担いで出ていった。

綾子たちの引越しときは伊川と同じらしく、それはこの倉庫の下棟の、いまは廢墟となつてゐる古い独身寮で、学校関係者十人は一室に入るのはよいとしても、電灯がないのだという。

一同どやどやと倉庫を出、一旦大通りへ出て坂を下り、その細長い暗い独身寮へ入つてみて、綾子はまるで病室のようだと思った。まんなかにコンクリートの通路があり、ここにはところど

ころ小さな豆電球が灯っているが、示された六号室のドアをあけると、そこは暗黒であつた。ドアを開け放して廊下の灯りを入れながら、順番に部屋に入ると、岡本先生が、

「四帖半じゃ。ちよつと狭いが」

といい、なるほど全員坐つてみると、畳の上にはもう空間はなかつた。

ここで十人、どうやって寝るかということもあるけれど、それよりも皆、あの何をしても人の視線のある大部屋から、壁とドアで仕切られた小ぢんまりした場所に移つたことに興奮しており、綾子もはしゃいで、

「ここやつたらもうあのラジオの声も聞えんしねえ」

などといい放つたりした。

皆にとつて珍しいのは、北側の二重窓と壁のペーチカで、窓からは坂の下の方の棟の電灯が見え、目が馴れると、まるく突き出たペーチカの焚口などもおぼろげながら見えてくる。綾子ははじめて見るペーチカが珍しくて、その小さな焚口を開け閉めてのぞいてみたが、要するに温突は床をあたたためるもの、ペーチカは壁をあたたため、そこから放射する熱で室内の気温を上げるのだと判つた。

寝るのは、窓を枕に蒲団を三つ敷き、押入れ側に岡本先生一家、まん中が村田先生夫婦、壁ぎわが綾子たちで、そして男と女がとなり合せないようにうまく横になり、綾子はいちばん端だったが、一旦足を伸べると、もう身動きならぬほどの狭さであつた。

なかなか寝つかれないためと、久しぶりに学校関係者だけの水入らずの雰囲気で、岡本先生が珍しく多弁になり、それによると、開拓団のひとたちは大通りの向う側、社宅のひとたちに詰め